
ふりむいて、王子様！

れいちえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふりむいて、王子様！

【Nコード】

N4157T

【作者名】

れいちえる

【あらすじ】

名も無き魔法使いの女の子が住む森に、一人の青年が迷い込んできた。彼は何と王子様！ 惚れた魔女っ子が王子様の気持ち振り向かせるべく暴挙の数々を繰り広げる！ 脅迫、誘拐、洗脳、暴動、破壊工作お手の物！ 唯一良識あるのは彼女の使い魔、黒猫一匹。世間知らずな二人が織りなす勘違いラブコメ、いざ行かん！

(注) これは以前「小説&まんがコミニティ」というサイトにてリレー小説に参加した際の物に、大きく加筆修正したものです。(各回の原案担当者のお名前を前書きおよび後書きに併記しています。

記載無き場合はれいちえる担当分です)

第一話 「思いはちゃんと伝えましょう」(前書き)

他サイト様にて、三年ほど前に参加しましたリレー小説(未完のまま放置されています)を大きく加筆修正してお届けいたします。

第一話 原案…アグア・イスラ(水島 牡丹)様。

第一話 「思いはちゃんと伝えましょう」

ある所に、魔法使いの女の子がいました。

その女の子には名前はありません。

ずっと魔法の森の奥に住んでおり、人とはあまり会いません。

魔女の家には一匹の黒猫の使い魔、ピエトロがいるだけです。彼女の話し相手はこの黒猫一匹だけ。だけど寂しいなんて思うことなく暮らしていました。

そんな彼女が住む森の奥に、ある日一人の青年が迷いこんできました。

森の奥に人が入ってくる時は決まって面倒事が起きることを何度も経験してきた彼女は、青年がさらに森の奥深く、自分と使い魔のお家のある所にまで入ってこないよう、森から上手に出られるようにそっと魔法で手助けをしてあげました。魔法のホウキに乗って空から目印を落とし、木々の並びを変えます。青年が彼女の存在に気付いたりしないように注意して、自分で道を見つけていると思い込むように、知らず知らずのうちに森の外へと導きます。

「それにしても、どうしてこんな森の奥にまでやってきたのかしら。狩人や木こりだったらこの奥に入ってはいけないってことくらい知ってるはずなのに」

それならこの青年は狩人や木こりではないはずですよ。狩人や木こりでないのなら、一体彼は何者なのでしょう？ 彼女の心にこの青年への興味がわきました。青年はきれいな顔立ちで、身に着けた衣服もとても上等な物に見えました。赤錆色の短めの髪も艶があって

手入れされているようで、野暮ったさはありません。自然と匂い立つ優雅な雰囲気とそのミステリアスな彼の素性に、女の子の心は短い間に知らず知らずのうちにどんどん惹かれていきました。

日が暮れるよりも前に青年は森から出ることができました。森から出るやいなやきれいな顔立ちの青年は何人もの人々に取り囲まれ、ひかれてきた白馬に乗って帰っていきます。どうやら只者ではないようです。不思議に思った彼女は、その青年の後をそのまま魔法のホウキで追いかけてました。追いかけていった彼女は青年が入っていた建物を見て正直驚きました。なんとそこはお城だったのです。

見目麗しい青年。

上等なお召し物。

取り巻きの人々。

毛並みの整った白馬。

入っていったのはお城。

これらのことから導き出される答えはひとつ。

この青年は、この国の王子様。

そして彼女は、一つのこと気が付きました。青年に恋をしているのだ、と。

魔女である自分と、次期国王であろう青年。

何とも不釣り合いです。普通に考えれば諦めざるをえない身分の差。身分の差どころか、魔女は恐れの対象で、むしろ存在を疎まれるくらいのもんです。普通なら叶わぬ恋と諦めるところです。

ですが彼女はれっきとした魔女。普通じゃありません。彼女は青年を自分のものにしたくなりました。なんとしても。彼女にとって空気はあくまで吸って吐くもので、読むものではありませんでした。

不可能だ、と言われたらむしろチャレンジしたくなる。そんな厄介な反骨精神を宿した女の子が一生懸命考えます。

「どうしたら良いんだろう？」

いっぱい考えて、彼女は一つの答えにたどり着きました。

数日後、魔女はその青年のところへ行くことにしました。魔法のホウキに跨ってお城に向かいます。高い壁なんて空からの攻撃に何の役にも立ちません。まんまと城内に侵入した女の子は、さらにお城の中でも警備の甘いところを見つけて忍び込みます。すごい手際です。そしてどこでこんなスキルを身に着けたのかと誰もが疑問に思うほど、とても素人とは思えない身のこなしでした。

そのまま誰かに見つかる事無く王子様のところに向いました。どこの部屋に王子様がいるのかなんて知りません。ですが恋の嗅覚に頼って一直線に向います。お付きの黒猫ピエトロは、いつお城の人に見つかって叱られたりしないかと気が気でなかったのですが、ラッキーなことに誰にも遭う事無く一つのお部屋にたどり着きました。扉を押しあけると、その先に広がる大きな部屋には大きな窓辺から外を見ている青年が一人いました。

整った顔立ち、上等な召し物。そして短めながら艶のある赤錆色をした髪。

恋は本当に魔法です。ここは王子様のお部屋でした。

一発で目的地を嗅ぎ当てた不法侵入の女の子に対しても、王子様は丁寧な声をかけました。

「君は誰だい？」

彼女は思いついた、とてもいい考えを披露します。

懐に手を差し入れると何かを取り出し、にっこりと微笑み、恋する乙女の眼差しを王子様に向けて、胸の高まりを一生懸命に抑えながらゆっくりと、一言一言聞き取りやすいよう口にします。

「王子様、私の家に来て下さい」

彼女は何の捻りもなくそう言いました。色んな小細工などしない。この想い、ストレートに包み隠さず伝えるべし。いつだって乱戦を制するのは戦力を集中した部隊による強行突破。

しかし、どう見てもこの場合大敗することが目に見えています。普通に戦死です。草葉の陰から後にくるものを見守ることになるのがオチです。

ところが王子様は喜んで直ぐに従いました。ミラクルが起きたように思えますがそうではありません。こうなるのが当然でした。

なぜなら、魔女の手には鋭い、凶悪そうな刃物が握られていたのだから。

使い魔である黒猫が言いました。

「ご主人、魔女なんだから魔法を使おうよ。媚薬を作る時間なら十分にあったじゃない」

「あら、ピエトロ。魔法を使うだなんてそれはフェアじゃないわ。魔法で従わせるなんて恋ではないもの」

「……ご主人、これも恋じゃないよ。分かってる？」

王子様は、魔女の女の子の前に、両手を挙げて震えています。

どう見ても彼女の行き着いた考えはただの脅迫。如何なる時代でもアウトな物。それを採用することは人間としてどうかと思われても仕方ありません。でもそれもすべてたったの一言で片づけられます。

魔女だから。

彼女は、魔女なので殺人も人攫いも、特に気にしません。

下手の考え休むに似たり。結局何も考えていないに等しい彼女の行動を咎めることは誰にもできません。

なぜなら彼女は魔女だから。

さあ、彼女の想いはちゃんと王子様に伝わるのでしょうか？

第一話 「思いはちゃんと伝えましょう」 (後書き)

原案…アグア・イスラ（水島 牡丹）様。

すべてはここから始まりました。何故か創作意欲がガンガン湧いたあの頃……

参加された皆様と音信不通になってしばらく経ちます。皆様今どこに行かれたのでしょうか。もしご覧になっていらっしゃったら、連絡お願いします。

第二話 「前と周りをよく見ましょう」

魔法使いの女の子は刃物を突きつけられた王子様をみて、この作戦は成功だ、と直感しました。

人間は一定以上のストレス下に置かれた場合、それを共有する人間を肯定的に見る傾向があると言われます。また恐怖で支配された状況では、被害者は反抗するよりも加害者に対して協力、信頼、好意でもって対応しようと無意識に心理が働くとも言われます。その相手がもし異性だったらなおのこと。

「この胸の高鳴りは、もしかや恋？」的な発想が飛び出します。ある意味魔法な思考です。そう考えると、今魔力の一切を使っていないと言うのに王子様に魔法をかけつつあるこの女の子は、生粋の魔法使いです。

彼女はこう考えました。

王子様はこう思っているに違いない。

「一つ間違えようものなら、柱に括られた自分の周りに香草の変わりにたくさん薪を用意され、気が付いたらミディウム・レアーにおいしく焼かれてしまいかねないこの中世の雰囲気漂うお城の中で、こんな形で脅迫を受けるとは思わなかった。

この状況はまさにDead or Alive。

いやむしろ返答によってはDeath or Die。

この長い人生の中でも極限の二択。こいつはなかなかに厳しいフラグだぜ。

だけど、この胸の高鳴りは……なに？

今までこんな風に見たことなんて無かった。

僕の前では誰もがいつも畏^{かしこ}まって、必ず一步退いていた。彼女は何て堂々としているのだろう。

僕に臆することもなく、僕の命を盗ろうとしている。

だと言うのに、そんな凶行をしていると感じさせない……

ああ、何てかわいらしい微笑みなんだ。

この人になら、一生をささげても構わない……」

……と。

まさにお花畑。彼女の頭の中には一面の季節はずれな美しい花々が咲き誇っています。そしてそんなおめでたい彼女の後ろには、赤や黄色やピンクや白の花弁を持った数々の花々が花開いているのが見えてくるような気がします。本当に魔法な思考でした。

王子様の背中に出刃包丁を突きつけ、変なにやけ面を晒していた彼女をとは対照的に、王子様の顔は血の気が引いて言葉が出ない様子です。

魔女がかけた心理の魔法は今のところまだ十分に効果を示してい

ませんでした。びくびくと怯えて歩く王子様は自分の部屋の机に蹴
躓いてしまいました。同時に机の上の花瓶が落っこちて、がしゃー
ん！ と大きな音を立てました。普段ならそんなミスをしない魔女
の女の子も今は心ここに在らず。花瓶が割れたことにも気付いてい
ません。

いくら争いがなく平和ボケした国とは言え、さすがにお城の衛兵
達も侵入者の痕跡に気付き、城内のあちこちで賊の搜索を始めてい
ました。大きな音が立った王子様のお部屋に一人の衛兵さんが慌て
た様子で入ってきました。そしてその現場を目撃します。大きな声
を出して集合を呼び掛けます。わらわらと城中の兵隊さんが、王子
様の大きな部屋いっぱいになるくらい駆けつけました。

大の大人が、まだまだ子供にしか見えない女の子相手に鎧を着込
んで、出刃包丁なんかよりもはるかに大きくて鋭い、人を殺すため
の道具を突きつけます。

殺されそうになった女の子が否応なしに人質を取った構図でした。
……こうなつた経緯^{いきさつ}を知らなければ。

お花畑の中心に立ったにやけ面の魔女は自分の周囲に全然気付い
ていません。大ピンチです。まだ心理の魔法がかかる前だった王子
様はほっと、安心した顔を浮かべています。

突然衛兵達が吹き飛びました。皆が振り返り驚きます。

そこには人よりも大きな姿をした豹のような生き物が居たのです。
そして、

「……主人に何を向けている？ 下がれ、下郎が」

何とそれは人の言葉を発したのです。

第三話 「人と見比べてはいけません」

「下がれ、下郎が」

人の言葉を発したその眼光は鋭く、衛兵は全員ちびりそうになりました。

それもそのはず、彼らは衛兵で日々訓練をしてはいますが、戦争や騒乱を経験したことはありませんし、お城は威厳漂う姿ですからテロを起こそうなんて大それたことを考えるような輩やからが現れることも一切無かったのです。こんなモンスターがいきなり本陣に現れるだなんて、想像すらしたことはありませんでした。

モンスターの出現は想定範囲外だったのは仕方ないとしても、危機意識が十分でなかったことは反省すべき点でしょう。

そして災厄はいつも突然に襲いかかります。

緩んだ危機意識をすり抜けて突如現れた国を揺るがしかねない災厄（現在にやけ面の女の子）が歩き出しました。まだ周囲の状況に気付いていません。王子様の背中を出刃包丁で突つつきながら歩いていきます。彼女を守るために黒い巨獣がそばに控えて周囲に睨みを利かせ、足音静かに進みます。

「……ご主人、いい加減にこっちの世界に戻ってきてくださいにや」

この場に居たのはお城の関係者を除けば、魔法使いの女の子と黒猫一匹だけのはずでした。今は女の子一人と黒豹が一頭。黒い小さな猫はどこにもいません。恐ろしい魔獣の姿をしているのに語尾がかわいいそれは、尻尾で魔女の頭をなでなでしました。それにも全然気付きません。

「ああ、どうしてボクはこんなダメダメ魔女の使い魔になってしまったのかにゃ」

どうやらこの黒豹がピエトロのようです。本当の力を発揮する時にはこのような魔獣^{へんげ}に変化するのでしょうか。とても偉大でしなやか、その姿に畏敬を覚えます。がしかし、さっきの台詞は決して口にはしません。あくまで心の叫びです。したらネコ鍋にされてしまうからです。

ピエトロが恐れるネコ鍋。それはネコたちが鍋をベッド代わりにして、丸まって眠っているような可愛い姿を指し示した比喻法ではなく、ちゃんとした鍋料理。作られる調理場を表現できません。その画は全面モザイクで自己規制をさせていたのだと思います。ネコたん、ネコたん。ニャーニャー、おいでおいで。ペろペろしてくれるの。癒される。そんなかわいいおネコ様に何て事を！そこに直れ、肅清してくれる！ おっと。

へらへらしたまま魔女は青い顔をした王子様を連れて部屋から出て行きました。兵隊達への警戒は変身したピエトロが怠りません。誰も近づけませんでした。

魔女の野望へ一歩ずつ前進中です。

その一歩は人間にとって小さな一歩でした。
しかし彼女にとって人生を左右する、大きな一歩でもありました。

「はは、アンタかい？　うちの王子をさらって行くなんてバカやらかしてんのは」

誰もが近づかない、いえ近づけない王子と魔女と魔物のパーティーの前に立ちはだかる勇者が颯爽と現れました。

「あ、アルファアーネ！！」

王子様の声を聞いて、魔女はようやくコッチの世界に戻ってきました。

そして俄かに不機嫌に眉を顰めました。

アルファアーネと呼ばれた人物を見たからです。

その人物は長いストレートヘヤーをして、小顔で鼻筋がすっと通り、眉は細く整えられ、少し切れ長の二重の目が見る人の心を奪う、万人の目を惹くようなすらっとした美人。
それもないすばでいいでした。

一方の魔女の女の子は短めのくせつ毛で童顔、その両目は大きく愛らしく、黙ってさえいればかわいらしいのですが、今は性根を映したかのようにたいそう歪んでいます。そしてローブの下に隠しています、お顔の見た目通りに体型もまだまだ幼いままでつるぺたな感じでした。大丈夫、諦めないで！　まだ余地はあるよ！

自分にはないその特徴を一瞬で見抜いた彼女は、改めて王子様を見ます。

王子様のこれほどにない開放感と期待に満ちた顔を見て、王子様の笑顔を受ける女の人に向けて顔を怒りにまかせてさらに歪めます。

とてもとても怖くて、それを見たピエトロは巨大な豹からかわいい子猫に戻ってしまいました。

第四話 「危ない物はしまいなさい」 (前書き)

第四話..原案 アグア・イスラ (水島 牡丹) 様

第四話 「危ない物はしまいなさい」

突如現れた美女に、魔法使いの女の子の怒りは頂点に達したようです。

王子様の視線を受け止める女は私一人でいいわ、と魔女は思いました。ずっと一緒にいるピエトロには魔女がそう考えていると直ぐに分かりました。

うわ。ご主人の目、殺意満点だよ！

そう気付いてピエトロが美女に対して注意を促そうとしたまさにその時、

「王子は、この私が守——」

素手のままの美女が台詞を言い終え構えを取る前に魔女が飛び出しました。

順手に持っていた出刃包丁はいつの間にか逆手に持ち変えられていて、右フックを打ち出すように美女の喉元に襲いかかります。

美女は紙一重でその刃を躲したのですが、さらに踏み込んだきた魔女は逆手に持ったまま出刃包丁で突きを繰り返します。

美女はとっさに右手で出刃包丁を払って右足で蹴りこみましたが、小柄な魔女はそのまま美女の脇をすり抜けるようにして避けました。背後に回り込んで美女の背中、肺の辺りに向けて再び出刃包丁を突き刺しました。しかしその刃は空を切り、次の瞬間には魔女はバランスを崩してしりもちをついていました。包丁が刺さる前に美女が素早くしゃがみこんで後ろに向かって下段回し蹴りを放っていたのです。

右手をついて体を起こそうとしていた魔女に向けて、立ち上がった美女が渾身の力を込めた正拳を振り下ろします。

長くしなやかな肢体で行われた一連の舞うような動きに周囲の衛兵達の目は釘づけでした。勝利を確信した下段突き。ですが、その直後歓声は呑みこまれ、静寂が広がりました。

美女のお腹からぼたぼたと、フレッシュな血が地面へと流れます。

「ちくしょう…… いつの間に持ち替えたの……よ……」

魔女の左手に順手で持たれた出刃包丁が美女の細くくびれたウエストに飲み込まれています。赤く染まった刀身が引き抜かれると、美女の膝が崩れ落ち、刺されたところを押さえたまま床に倒れ伏しました。だんだんと赤い池が広がっていきます。

その光景を見て魔女は言います。

「これぞ、恋というもののだね。恋敵と戦うのも青春だわッ！」

「……ご主人、この場合『戦う』の定義が全く違うよ。分かっている？」

「あら、ピエトロ。戦いというのは、何時だって血生臭いものなのよ」

実際に『戦闘』しなくていい、と声を大にしていきたい。恋を勝ち取ると言うのはそう言うことではない、お前は何と戦っているんだ、と。

自分の過ちに気付かないどころか、その結果に対して満足気なご主人に、使い魔のピエトロが青ざめます。

王子様も真っ青になって、がたがたと震えながら眩きました。

「あ、アルファ―ネ……」

絶望の呟きです。

魔女は、先程の王子様のアルファ―ネへの期待混じりの響きとは、全く違ったこの響きに満足しました。

これで王子様に頼られる存在は、自分以外無くなった。

歪んだ達成感に満たされた魔女は、つい今先ほど何が起こったのか全く知らない人が見たら、釣られて笑顔になってしまうほど、とても明るくかわいらしい笑顔を浮かべていました。

魔女と王子様と黒猫が行進を始めました。もう王子と魔女と使い魔のパーティを止めるものはおりません。

魔女のスケジュールとしては、あとは帰宅して愛を語り合い、そしてラブラブでうへへな生活が待っただけです。しかし世の人はこれを誘拐と呼びます。犯罪です。とても認められるような事ではありません。

それに王子様には、魔女を受け入れるスペースはありません。もう全面的に拒否の構えです。何故自分に刃物を向けているかも分かりません。

他国の暗殺者だったら、こんなに回りくどいことをせずにもうすでに命を奪っているに違いない。ならばこの女の子は新手のテロリストなのかもしれない、なんて王子様は考えています。恐怖で人心を支配しようとするテロリズムに対して屈してしまうことに忸怩たる思いすら抱いているかもしれません。

この凶刃の前に倒れた、自分を守るために戦った存在のためにも、この犯人を何とか捕まえなくては、と王子様は心に誓いました。

こんな状況で魔女の思惑通りに進むのでしょうか。

第四話 「危ない物はしまいなさい」 (後書き)

原案…アグア・イスラ (水島 牡丹) 様

第五話 「話は最後まで聞くべきです」 (前書き)

第五話 原案…しい様

第五話 「話は最後まで聞くべきです」

「ね、ねえ、君はどうして…… ぼ、僕を連れ去ろうとしてるんだい？」

目の前に倒れて虫の息のアルファーネを見下ろして恐ろしい笑いを浮かべている女の子に、王子は勇気を振り絞って、今まで一番気になっていたことを尋ねました。何かこの女の子の正体につながるヒントを得られるかもしれません。ですが冷静に考えれば何か明確な信念、意図を持ったプロのテロリストであれば、こんなところでそんな情報を漏えいすることなんてないと分かります。その目的を知る時、それは王子様の命が奪われた時にほかなりません。

「あら、そうでしたわね。私ったら、まだ何もあなたに教えてませんでしたわね！」

王子に話しかけられた魔女は、倒れているアルファーネに向けていた表情を0コンマ1秒程で変え、瞬時にバラ色に染まった顔を王子に向けてました。

「この変貌、いつもよりよっぽど魔法」

「何か言ったかしらピエトロ」

「……いえ何も」

くるくると変わる彼女の表情を見た王子様は、彼女に言われる前に、ハッと気付きました。

急に、こんなに真っ赤になって…… 何なんだ……？
ま、まさかこの子…… もしかして…… 自分に……

途端に、青ざめていた顔が真っ白に変わりました。この上ない恐怖をまた感じたのです。

僕に何か恨みを持っているのかもしれない！

……かわいそうに、普段全く不自由のない生活をしていた王子様は、緊急事態に勘が働きませんでした。彼は彼女の赤面を自分に対する激しい怒りだと判断してしまったのです。表情を読む能力に欠けていました。

しかし魔女は、そんな王子様の考えを知る由も無く。ピエトロに睨みをきかした後、再び王子様にバラ色の顔を向けます。

「私はあなたを一目見た時からとってとっても」

「ま、待ってくれ！　なんだか良く分からないが、本当に悪かった
！」

王子様は、突然頭を下げました。謝ればなんとかかなると思ったのです。そんな王子様の行動が意味するところが魔女には全く分かりません。

私は王子様に恋してしまったから、王子様を私のものにしたいだけなんだけどなあ……。

面と向かって伝えようとしたのに腰を折られてしまった彼女はいささか不満気味でした。でもそんなことは些細な事。まずは王子様をゲットです。ゲットして邪魔が入らないところで改めて伝えましょう。ふう、と小さくため息をついて心を落ち着けたところで小猫

モードのピエトロが足元に寄って来て、ご主人のふくらはぎのあたりに小さな前足の柔らかい肉球でぽん、とタッチしました。

「ほらね、ご主人様。やっぱりこんなやり方、よくなかったんだよ。今は従わせるだけだからどうにかなるだろうけど、いざ自分のものにしたとしても心が着いてきてくれなかったら厄介なことになりそうだよ」

「あら、ピエトロ。言ったでしょ。恋は恋。私のものになれば、もう私たちはHappy Endよ」

「王子は違う意味でEndになりそうなんだけど……」

「何よそれ。まずは邪魔が入らないよう私の家に連れて行けばオツケーなのよ！ 一緒にいることから始まる愛をゆっくり育てたらいんじゃない」

魔女はピエトロの言っていることを全く分かっていないようです。ストックホルム症候群という言葉調べた方が良いのではないのでしょうか。この場合愛が育ったように錯覚しても、いずれ王子様が正気に戻ってしまった時、それまでの好意が一気に憎悪となって反転します。長期的予後で考えると不良です。

「さあ王子様、早く私の家に向かいましょう」

「そ、そんなっ！ ぼ、僕が何をしたって……」

王子様は謝っても全く効き目の無かったことにショックを受けました。そりゃそうです。大切な言葉を遮っただけじゃなく、さらりと出てきた超重要キーワードを右から左に受け流してしまうような思考形態では生き残れません。自分は魔女の家でいったいどんな復讐を受けるのだろうか、間違った被害者妄想にただただおびえていました。

「何をしているの、ピエトロ。あなたもさっさと歩くのよ」

「……ご主人、ちゃんとやり直そうよ。その方が」

「アルファーネ、とってもかわいいそうね（棒読み）」

「行きます。すぐに行きます」

城内一の腕利きの戦士が倒されたことで士気を完全に折られた衛兵さん達の中に、この暴挙を止めに一步踏み出すことができる人はいませんでした。見目麗しい青年と若干幼く見える女の子と喋る黒猫の奇妙な一行は、とうとうお城の門をくぐって出ていってしまいました。

……ピッ。

「あ、あの雌豚…… 王子は…… 私……！」

だんだんうつろになってゆく意識の中、遠くなって行く女の子の後ろ姿をしっかりと目に焼き付け、王室に繋がる無線を右手に、倒れ伏した美女は最後の力を振り絞ります。

「こ…… こちらアルファーネ……。何者かが、王子を拉致し…… 城下へ連れ去って……」

……最後まで言い切ることはできませんでした。

第五話 「話は最後まで聞くべきです」 (後書き)

第五話 原案…しい様

これがラブコメ…… だと……？ なんだか甘々でもなくじれじれでもなく、ただ暴挙に出ているだけの気がするの自分だけではないな……

第六話 「お互い名前で呼びましょう」 (前書き)

第六話 原案…前半 桜雪 木乃(八束)様&後半 アグア・イス
ラ(水島 牡丹)様

第六話 「お互い名前で呼びましょう」

ところ変わって魔女一行。

剣呑な雰囲気につつまれつつあるお城のことはいざしらず、いまだにガクガクブルブルと震えている王子様と、相も変わらず頭の中がお花畑状態の彼女と、彼女に逆らえないピエトロは城からすこし離れた場所を歩いていました。血糊の残った出刃包丁はいまだ彼女の手にあります。

王子様から見たら誘拐。しかし魔女の意見としては本人の同意の上で、です。犯罪に手を染めた人間が自分に都合のいいように事実の解釈をするのはいつの世でも、どの場所でも同じなのでしょうか。

にこにこ笑顔の彼女はとても満足そうだったのですが、さすがに無言のままではつまらなくなってきたのでしょう。それにお互い言葉を交わしたのはさっきが初めてで、お互いのことを何も知りません。お家に着いてからいろいろと深く知り合えば良いと思っていたのですが、一人乗りの魔法のホウキでお城にやってきたのとは異なり帰りは徒歩。時間がかかります。

変化したピエトロに乗ればいいのに、と思われるのですが、乗り心地が良くないと言うことで却下されました。お城まで乗ってやってきた魔法のホウキは、ピエトロが前足で抱えて、後ろ足で立ち上がってテコテコとついてきています。

何から聞こうかと考えていた魔女が口を開きました。

「ねえ王子様、王子様はなんて名前なの？」

「ぼ、僕、の……？」

そう、お互いを知りあうにはまず名前から。きらきらと瞳を輝か

せて、魔女は問います。一見とてもかわいらしい。ですが手には常時刃物、ピエトロはそれから怯えるように視線をずらしているのですが、城のある方へ常に意識を向けています。主人を守るための使い魔として警戒を怠りません。

王子様は答えるしかない、と震える口を精一杯動かそうとしますがそのぎらぎらと光る刃物が、と言うよりもそれを扱って人を目の前で殺めた女の子の姿が脳裏によぎり、怖くてうまく答えられません。それでも頑張っていました。

「僕のな、なま……」

「そう、わかったわ!」

ばん、と手をうって、彼女は勝手に話をすすめていきます。どうやらこの魔女特有の恋回路で王子の名前の結論がたようです。本人の意志などこの際無視らしいです。知り合う気、分かり合う気は無いのでしょうか。

「クリストファー・ルパート・ウィングミア・ウラジミール・カルアレクサンダー・フランソワレジアルド・ランスロットハーマン・グレゴリー! 素敵! 私が恋した王子様ぴったりの気品あふれるお名前! そうねえ、でも長いからどう呼ぼうかしら……?」

どうして自分のところに魔女がやってきたのか、答えとなる超重要キーワードが今回も含まれていましたが、勝手な妄想で人の名前を作り上げた魔女のある意味マジカルな思考回路にあっけにとられてしまった王子様は聞き逃していました。本当に不運です。

タイミングを逃すのは与える側にも受け取る側にも、両方ともに問題があるのだ、と言うことがよくわかる瞬間でした。

……少なくとも、ピエトロはそう理解しました。

きらきらと目を輝かせたあと、魔女が（自分が勝手に名前を想像した）王子様をどのように呼ぼうかと考え込み始めると、いままで黙っていたピエトロが低い唸り声を上げました。

「ご主人、なにかがいる……！」

ピエトロの何かがいるという言葉に魔女の目つきは鋭くなりました。出刃包丁をしまい、ゆつたりと余裕のある黒のローブの袖に手を突っこみ、中から取り出した物をピエトロが唸り声をあげた方向に向けて投げました。

「着火っ！」

すると、魔女が投げたものが大爆発しました。そう、爆弾です。茂みから爆風に飛ばされたモノが無残な姿となってぼとりと地に落ちました。

「あら、敵かと思ったら、ただの動物だったわ」

「ご主人、だからせめて魔法を使おうよっ。魔女なんだからさ」

「あら、ピエトロ。せめて、ただの人間や動物にもチャンスを与えなきゃ」

魔女はチャンスを与えますが、決して反撃は許しません。

「チャンスを与えてもこれは意味ないよ、ご主人」

ピエトロは自分の主人と遭遇してしまった悲劇を憐れみながら、^{むくろ}軀を晒す生き物だったものに近づいていきます。

「あら、ピエトロ、ただの動物と思ったら、子猫だったわ。可哀相」
「ギャああああああああああああっ！　ボクの同胞があああっ！」

魔女は決して、反撃を許しませんでした。ちくしょう……！　子猫を……っ　世界の輝きを……っ

王子様はただただ、震えています。

結局追手や救援は来ません。そして魔女の冷酷な面を二度も目にした王子様は覚悟しました。この悪漢を下手に刺激してはいけない、自分が助かるにはまず従順であるべきだと。

そしてそのためにはまずこの魔女の名前を知り、お互いに名前を呼んで親しくあることを望んでいるとアピールするべきだと。

……謀らずしも彼女の思惑通りです。ストックホルム症候群一直線の思考です。

「き、君の名前は何と言うんだい？」

「あら、王子様、私に名前はありませんの。王子様が付けて下さいな」

魔女の手にはまた、凶悪な刃物が握られています。

「……み、ミザリーとか」

ピエトロが仰天しました。

不幸、という意味です。今の王子様にとってまさに相応しいネーミングと言えるでしょう。

しかし状況が状況です。何と言う事でしょう、王子様も空気が読めない。KYです。ピエトロは王子様の死を覚悟しました。

「あら、きれいな響きの名前ですわね」

ピエトロは目ン玉をひん剥きました。やんわりと主人に即決させないようにつなぎます。

「ご、ご主人、王子は『とか』、って言ったよ。他の候補も聞いてみようよ」

ミザリーに決めてからその意味を知ったら怖そうです。

「あらそう」

ピエトロの会心の一撃でした。今そこにある危機を回避できました。王子様は別の名前を考えます。

「ジェイソン」

「それ男の名前じゃなくて？」

というより、殺人鬼の名前で有名です。

「じゃ、じゃあ、フレディ」

「何だか、フレンドリーな名前ね、私には合わないわ」

そういうことではない気がします。悪夢の中で追われ続けたいのでしょうか。

「なら、アリス」

「アリスッ！ 素敵な名前ね。気に入ったわ。どう？ ピエトロ」

「まあ、……それなら」

目を逸らしながら、ピエトロは妥協しました。

「アリス、きっと私みたいにお淑やかで可愛い女の子に付けられる名前よ」

「……」

ピエトロは黙りました。名前のイメージとしては確かにそうかもしれませんが、ご主人には…… などと言ったらネコ鍋です。

にぎやかに、のどやかに、仮初の平穏を楽しみながら二人と一匹は森の中に入っていました。魔女のお家はもっと奥の方です。魔女にとってはこの森は自然にあふれて豊かな環境で静かに愛を育む天国に映りますが、王子様にとっては陽の光が届かない、深い地獄への入り口が口を開けて待っているように見えていた事でしょう。

その両方を傍から見ていた小さな黒猫は、魔法のホウキを抱えたまま、はあ、と小さくため息をつきました。

その頃、所変わって、お城。

凶刃に倒れた美女からの通信を聞いた王さまは、こんな事を言っていました。

「今日、何者かに王子がさらわれた！　王子を保護した者に報奨金二億、女性であれば王子と結婚する権利を与える！　一刻も早く王子を連れ戻すのだっ」

王子様本人の意思そっちのけのまま、目の前に褒美を吊り下げられた馬車馬のように、玉の輿を狙う国中の美女たちが王子を探すことになりました。

第六話 「お互い名前で呼びましょう」 (後書き)

第六話 原案…前半 桜雪 木乃(八束)様&後半 アグア・イス
ラ(水島 牡丹)様

第七話 「やさしい人が一番です」

まるでやわらかく包み込んで、このままでは飼い殺しにされてしまいそうな環境で育てられてきた王子様。世間や一般市民から見れば何不自由なく、何の苦痛もなく、ルールに沿って歩んでいけば用意された順風満帆の未来が間違いなく手に入る。しかし彼だって人の子。王子様も王族であり、後継者であると言うその運命の中でのいろいろと考えるところがありました。どう思い、どう生きていくかに悩む王子様。ですがそれはまた別のお話。

しかしどうしても環境は人の性質に大きく影響を与えます。逆境、苦境に曝され続けた人間は、常に現状を切り開くため苦しい現実のわずかな隙間を見出そうとします。良い言い方であれば、諦めない、ハングリー精神の高い人。悪く言えば疑い深く、猜疑心の強い人であるでしょう。常に満ち足り、信頼できる人達に囲まれていた人は、良く言えば寛大で包容力があり、悪意を込めて言えば騙されやすい甘ちゃんになる。

……これは個人的な意見ですので「それは違う！」とおっしゃる場合は、そつと囁いていただくか、華麗にスルーしてください。

文武に優秀で生まれに恵まれ、そしてその環境を無意識のもとで享受してきた王子様は、彼自身の奥底に持つ物が実は……と言うことだとしても、基本的性質はKY。経験不足から来るものだとは思いますが、拉致されてきた今現在ではそれは致命的なことでした。王子様がKYだなんて思いもしない魔女は、誰が見ても彼女の頭の上にたくさんの「♪」マークが浮いているとわかるほど上機嫌に

なっていました。

「アリス♪ アリス♪ 私はアリス♪」

ビミョーなメロディーに乗せて、初めて認めた自分の名前を繰り返していました。

名前が無くて魔女が困ったことはありません。なぜなら彼女はずっと、孤児みなしごの彼女を拾ったお師匠との二人暮らしだったからです。それにピエトロも初めから彼女のことを「ご主人」と呼んでいます。いつの間にか魔法使い（色んな意味で）のお師匠と暮らしていました。それまでの記憶はなく、彼女はこのお師匠の暮らし方や考え方、魔法の使い方を見て覚えてきました。お師匠はたくさん魔法を使い、たくさん魔法の薬を作り、たくさん悪いことを考え、気まぐれに人助けをしてきました。それをずっと見てきた女の子はお師匠と一緒にいた十年ちよつとの間でたくさんことを学び、自分で生きる力をつけていきました。

「小娘」

「お前」

十年以上も一緒に暮らしてきたのに彼女をそう呼ぶお師匠しか知りませんし、それをごく普通と思っていたので、名前で呼ばれなくてもへーとも思わなかったのです。というか、名前という言葉も知りませんでした。

しかし、ある時変わりました。

「おい、小娘。子猫を拾ってきたぞ。これからはこいつを使い魔として鍛えるんだ」

そう言ってお師匠は愛媛みかんの段ボール箱に無造作に入れられてモゾモゾしている黒い生き物を彼女に押し付けました。

目が開いていましたが、いまだ小さく生後二か月も経っていないさそうな黒い子猫。お母さんネコと一緒にでなければご飯も満足に得られなくて、自分で生きていく術に欠ける小さな命。

どうしてこんな状態で捨ててしまうのでしょうか。段ボール箱に入っていたと言うことはまず間違いなく人間の傍にいたはずです。殺すことを十分に理解した上での遺棄。拾ってくれる人がいるに違いないという甘え。育ててくれる人を探すと言う努力を放棄して、自分と同じ種族でないから構わないという実に見事な身勝手さを示してくださいました。

……お師匠と魔女見習いの女の子がそんなことを考えたはずもありますが、とりあえず言われたように女の子は子猫を受け取りました。

押し付けられたは良いものの、世話の仕方なんて知りません。適当に牛乳をスプーンですくって飲ませてみたり、とりあえず冷たくなってきたので抱っこして暖めてみたりしてみました。が、甲斐なくどんどん弱っていきました。

もともと元気いっぱい余力に漲っていたわけではありませんから仕方がないかもしれませんが、受け取ってほんの数日の間に子猫は動けなくなっていました。さすがに不味いと思った女の子はお師匠に相談します。

「お師匠。子猫があんまり動きません」

「それならこれを飲ませたまえ」

なにやらアヤシげな瓶を手渡しました。なみなみと入った蛍光紫

の液体。

どうみても、毒です。

女の子も「なんぞこれ」と思いましたが、自分は何も知らないの
で頼ることができるのはお師匠だけです。言われたとおりにその口
に流し始めました。途端に子猫はピクピクし始め、動かなくなりま
した。やっぱり毒だったのです。

止めを刺してしまいました。

「よし、上出来だ」

殺してしまって誉められました。彼女も別に後悔したり泣き崩れ
たりするわけでもなく、「あらー」とただその現実を受け止めてい
るだけでした。なんてことでしょう。彼女は他人に容赦をしない人
生を歩むことに抵抗を感じなくなってしまっていたのです。

全部このクソオヤジのせいでした。

にやにやししながらお師匠は子猫の亡骸を取り上げ、魔法陣の書か
れた床の上に小さな亡骸を置きました。ブツブツ呪文を唱えると魔
法陣からボワボワと煙が立ち始め、その煙が子猫の鼻や口に吸い込
まれていきました。

煙が全部なくなると、子猫が再び動き始めました。

女の子もびっくりです。びっくりして子猫を再び抱き上げました。

「おや？ あなたが助けてくれたんですね？」

もつとびつくりです。

「よし、成功だ。これでただの子猫は魔物としてよみがえったぞ」

全部お師匠の作戦通りでした。どうせ巧く世話の出来ない女の子の手で瀕死にまで追い込んだあと、魔法のクスリと儀式で使い魔に作り変えたのでした。なんという策士。

「子猫よ、貴様の名前はピエトロだ」

「名前？ 名前とは何ですかお師匠」

「そんなことも知らんのか」

知るわけありません。女の子が唯一知っている他人はお師匠しか居ないのですから。

「名前とはそれぞれを区別するために特別につける言葉のことだ」

「それじゃ、私の名前はなんですか」

「しらん。何でもええやろ」

カチンと来ました。

ネコには名前をソッコーで付けたくせに、女の子には名を尋ねることも、つけようとする素振りも見せたことはありません。

っていうか何で関西弁やねん。

ピエトロと名付けられた黒い子猫を女の子にもう一度押し付け、魔法の本とか道具とか薬の材料がいっぱい置かれた部屋に戻っていたお師匠の後ろ姿を、魔法使い見習いの女の子は苛立ちを隠すことの無いとても怖い顔つきで睨んでいました。

その晩ピエトロはおねしょしないようにトイレに起きました。まだまだ小さいのにもとお行儀のよい子でした。月明かり差し込むお部屋に入ると、異変に気づきました。まだ嗅いだことがないにおいがします。ですがいずれ飽きるほど経験し、何とも思わなくなるにおいだと本能が教えます。

においの出所はどこだろう、と黒い子猫は闇に溶けながら探します。わずかな月明かりにその小さな黄色の目が光り、暗闇の中に小さな宝石が浮かんでいるように見えました。

大きい何かが床の上に転がっています。月明かり程度でも昼間と遜色なく見ることが出来るピエトロは、転がっている何かの周りを足音立てることなく歩き、それをよく観察しました。

……女の子のお師匠です。

お師匠が一階の床で冷たくなっていました。背中には深々と出刃包丁が突き刺さっていました。お師匠の周りには黒っぽい水たまりができています。

さつき気付いたにおい、それは血の香り。

何かの事件性を感じ取ったピエトロは、子猫とは思えぬ機敏な動きで壁を背にして後足で立ち上がりました。ひげをピクピクさせて

周囲に気を配ります。その時、気付きました。

窓辺に誰か居ます。

窓から月を眺めているのは、自分を抱き上げてくれた女の子でした。

頬杖を着くその手は紅く染まっています。

その姿はとても恐ろしかったのですが、ピエトロは魅入っていました。

ピエトロはひざまずき、頭を深く垂れ、服従の意を示します。

「我が主よ…… 我は今ここに誓います。そなたを主人と呼び、付き従うことを」

名も無き女の子と、その使い魔の出会い、とても血生臭いものでした。

第七話 「やさしい人が一番です」 (後書き)

おネコ様へのラブばかりが出ています (汗)

キーワードの「ラブコメ」の「ラブ」は「作者↓ピエトロ (猫)」
ですか (大汗)

ここから先、もっとちゃんとラブコメ要素が出せるといいなあ

第八話 「掃除はこまめにやりましょう」 (前書き)

原案…アグア・イスラ (水島 牡丹) 様

第八話 「掃除はこまめにやりましょう」

魔女の家に着きました。ピエトロと魔女アリスと王子様の三人です。王子様はそのKYっぷりを発揮したものの、何とか生きて目的地にたどり着くことができました。

魔女のお家があるのは森の奥深く。ですがそのお家の周りは木々が切り拓かれて日当たりも良く、草花が咲き小鳥も舞っています。おどろおどろしく、ギャアギャアとけたたましく獣や鳥の鳴き声が響くような一般的なイメージとは違っていました。それだけでも王子様はほっと一息です。

森の入り口をまるで地獄の一丁目のように感じたことを、ちょっと悪いな、とも思っていました。確かにここは空気も新鮮で、湿気がひどすぎることも、また逆に乾ききっていることもなく、本当に自然にあふれる豊かな森。

こんな素敵な環境でどうしてこんな…… 環境で悪になった？ 違うね！ こいつは生まれつきの ウォッホン！ オホン！ オホホーーンっ！ えーっと。

王子様は、初めての民家、初めての庶民風の家、初めての平民の家へのお泊りです。王子様は戸惑っていました。何とかこの誘拐犯とフレンドリーな関係を築こうと、ストックホルム症候群的な思考のもと、好意的に受け入れる努力を始めています。

見る物触る物すべてが新鮮でした。なんだかんだで普段と違う物に対する好奇心は抑えがたく、結構すんなり受け入れられたみたいです。ですがここは魔女のお家。あらゆるものがスタンダードから

かけ離れていると言ってもいいでしょう。のっけからハードルが高くてすみません。

恐怖心は拭い去れてはいませんでした。上機嫌な魔女アリスの姿に少々安心しているようでした。

そして一つの事に気付きました。

「そうか、民たちの家とは、こういう変わった匂いがするものなのだな」

王子様、また、変なことを言い出しました。いや、確かに人の家の匂いは気になります。でもそれは開口一番にするものじゃありません。時にはその一言を不快に思う人だっているんです。

フォローするようにピエトロが答えます。

「普通の家ではこんな怪しい匂いはしないからね、王子様。うちだけの、”特有”の匂いだから」

ピエトロが前足で指し示した方には、火にかけられた鍋がありました。弱火でクツクツと煮たてられ、グプグプとねばっこい泡が立っています。見るからに毒々しい。吐瀉物としや以下の匂いがプンプンするぜ。色も真っ黒になったその中身が何か、それはずっとここに住んでいた、ピエトロにさえも分かりません。

「あら、王子様。それ、一年は前から煮ている煮物の匂いよ。食べます?」

にっこりと魔女アリスは笑って、オタマで一年前以上も経つ超熟成煮物を、平然と掻き混ぜました。今の精神状況だと王子様はまず間違いない、「はい」と言ってしまう。慌ててピエトロが王子

様を制し、魔女に進言します。

「ご主人、王子を一瞬で亡き者にしたくないなら食べさせない方がいいよ」

「そ、そうね、さすがに冗談が過ぎたかしら」

さすがに食べる物じゃあない、という常識があったようで、ピエトロも安心しました。ですが。

「さあ、ピエトロ、あなたのご飯よ」

器に盛られた真っ黒な超熟成煮物を出され、ピエトロは視線を逸らしました。しかしこのままだとまず間違いなく口の中に強制的に流し込まれてしまう事でしょう。慌てて、ひそひそと話題を変更します。

「ご、ご主人、せめて掃除をしようよ。王子様のことが好きなんですよ？　好きな男の前でいくらなんでもこれは、酷いよ。こんな泥棒が来た後みたいな惨状は」

見渡す限り、ゴミの山。足の踏み場也没有。

「それもそうね。あなたのキャットフードも一年前から消えたまま」

見つけたところで絶対、賞味期限切れです。

魔女は王子様に快適な生活を送ってもらう為、掃除を始めました。もちろん、魔法は使いませんでした。

魔女が悪戦苦闘する中、見かねてピエトロも手伝い始めます。王子も何やら貧乏民家に興味を持ったのか、一緒に手伝い始めました。

黙々と三人は掃除をしました。

一応は共同作業。魔女と王子様はいい感じです。ピエトロは思いました。このまま王子様が慣れてくれて魔女を制御してくれれば自分の負担はかなり減って楽になるな、と。徐々に王子様も魔女と普通に会話できるようになりました。

「ねえアリス、ここに吊るされている草は何なんだい？」

「え？ ああ、それは眠り草ですの。普通に生えている時にはたくさん食べても効果はありませんけど、日に当たらないように乾かして粉にするととてもよく効く睡眠薬なんですよ」

お師匠がよく作っていました。でも本当の用途は睡眠薬ではなくて別の事。今のところはそれを王子様に使う予定はありません。王子様は次々にいろんなものを探し当てていきます。

「アリス、この本は……？」

「まあ！ 探してた魔法陣の本！ そんなところにあったのね！」

魔女の仕事道具のはずなのに……

「なんでこんなところにガラスの壺が……？」

「ああ！ そのフラスコも！ 中身はまだ居ます？」

「いや、からっぽだけど……」

「からっぽ？ たいへんだわ！ ピエトロ、小人が逃げちゃった！」

「何言ってるの主人、このまえ小人はやつつけたよ。忘れちゃった？」

何を捕まえてるんだ、お前は。いや、作ったのか？ しかもやつつけたって何だよ、凶暴なのかよ。

「アリス、これはどうみても……」

「あらら、分解清掃して組み立て途中のままだったわ。すぐにやり直しますわ」

そう言って一般家庭（あるいは魔女の家）では普通お目にかからなさそうな黒光りするそれを、ざざっと流れるような慣れた手つきで完成させて、奥の部屋に片づけに行きました。

そんな和やかな（？）、まったり雰囲気のまま三人が掃除していた時。またしても王子様が妙なものを見つけました。今度はお家の離れにある、お風呂場と思しきところです。

「ん？ これは……」

ずるずると、洗濯物の山から王子は箱を取り出しました。あかによ、王子様。曲がりなりにもレディのお宅で洗濯物をこそごそするとか。普通は通報されるよ。

取り出されたものはなんと、キャットフードの箱でした。

「やった、キャットフードだ！」

いやいやいやいや、おかしいでしょう。なぜにこんなところにキャットフードが！

王子様はピエトロと一緒に喜びました。ピエトロなんて涙目です。危うく今後のご飯があのだ超熟成煮物になるところだったのですから。KYな王子様も先程超熟成煮物を出されたピエトロの身を案じる面があったらしく、ピエトロに催促されるまでも無く賞味期限を確かめてくれました。二人の間に妙な友情が生まれていました。

「大丈夫だよ、ピエトロ。食べられるよ。ギリギリ賞味期限内だ」

ピエトロがほっと胸を撫で下ろした瞬間、洗濯物の山の中とは別に、無造作に積み上げられたぼろきれや落ち葉の下に白いものを見つけた。

何だろう。ピエトロも知りません。一人で上手に毛づくろいができて、いつも艶やかできれいな黒い毛並みを整えているピエトロは、とくに嫌な臭いもせず洗われた事ありません。むしろほんのり甘く、落ち着くような香りがするくらいです。なのでこのお風呂場の近くに来ることなんてなくて、こんな風に散らばる物があるなんて知りませんでした。王子様とピエトロは、顔を見合わせました。二人で、そろそろとそれに近づいていきました。二人をととてもとても嫌な予感が包みます。

何やらそれは…… 骨、のような……

ピエトロは決死の覚悟で、その白い物を発掘していきました。王子様は青ざめています。

「じ、人骨だ……」

王子様とピエトロは震えだしました。王子様が泣きそうになりながら、言いました。

「先程の、鍋の中身はまさか……」

その王子様の言葉にピエトロが首を振ります。

「いやいやいや、いくらご主人が残酷でも、そこまでじゃないよ。そんな震えなくても大丈夫さ。例えそうだとしても、ご主人は王子を食べたりしないはずだから」

「あら、王子様こんなところにいらしたのね。探しましたわ」

良いタイミングでご主人が二人の方へとやってきました。
すかさずピエトロが問いました。

「ご、ご主人。掃除してたらいけないものを見つけちゃったんだけど？　これは、何処の仏さんな訳？　鍋とかに入れたりしてないよね？　あの鍋、真っ黒で何処か赤かったけど、この人じゃないよね？　そもそもこの人、誰さッ！」

とても早口です。それに対して魔女アリスは淡々と、知らなかったの？　とでも言わんばかりに平然と答えます。

「あらやだ、ピエトロ。これ、お師匠よ？　それにピエトロ、あなた一年前からずっとキャットフードの代わりに食べてたの、知らなかったの？　お師匠をおいしいおいしいって食べてたじゃないの」
「……っ」

本当なのでしょうか。ご主人の口から例えウソでも「嘘」という一言を聞いたかったのですが、願いは天に届きませんでした。ピエトロは、あまりに酷い現実一人で泣きながら、一つ一つお骨を集めてお師匠を埋葬しました。

ピエトロは自炊に目覚めました。自分のご飯は自分で作る。それが自分の身を守る唯一の手段でした。

王子様はピエトロに激しく同情しました。

第八話 「掃除はこまめにやりましょう」 (後書き)

原案…アグア・イスラ (水島 牡丹) 様

第九話 「完璧、なんてありません」 (前書き)

原案…クロクロシロ様

第九話 「完璧、なんてありません」

僕は昔から何でもそつなくこなしていた。そう、文字通り何でもだ。見て、僕が理解したものはすべて僕の力になった。

教えられた知識の吸収は教育係が目丸くするほどに早かった。自分以外の人間は一度見たものすら覚えられない愚図だと知った。鍛錬の一つの護身術も、実際にやってみれば教本を見ているよりも簡単だと知った。

ぼくは完璧だ。

生まれながらにして神に愛されている。そう信じて疑わなかった。

だから、これから完全に大人になるまでに、誰よりも賢く、誰よりも強く、そして誰よりも完璧になるのは容易。

王子で完璧だなんて、何て絵にかいたようなサクセスストーリーだろう。

だけど誰よりも偉くだけは、なれない。
最高位に座れない。

お父様が居るからだ。

お父様は僕より間拔けで、僕より弱く、まったく完璧じゃない。
誰よりも秀でた僕の足元に及ぶはずがない。

だけど誰よりも、偉い。

今現在の段階で、僕以上の能力を持つ人間は皆全部お父様の物だ、お父様の部下だ。

邪魔だ。

邪魔だ。

物凄く邪魔だ。

あの玉座はぼくにこそ相応しい。

いずれはお父様が年で玉座を僕に譲る。そんなことを待っていない。だから考えてた。ずっと考えてきた。僕が頂点に立つ方法を。

完璧になる運命にある僕にはまだ足りない、頂点に立つための力が。

そんな時、聞いたんだ。

城の召使いが話していた森に住む魔法使いの噂を。

その魔法使いは酷く人間嫌いで人里を離れた深い森の奥に住んでいる。人々と関わることを避けているアレに関わろうとする者は皆平等に不幸になると言う。

謎の途中退場を強いられた要人の数々は、アレの作る秘薬による犠牲者だと噂された。

この国の辺境あたりで時折起きる疫病なんかはアレが広めていると信じられている。

それなのに人間を嫌い憎んでいるとさえ言われたソレは、時に貧

しい弱者の力となって秘術を用いて、盗賊団を始末し蛮族をすべて滅ぼし、崇められている地域だってあると言う。

魔法使いとは一体何なんだ。

僕とは真逆の、日の当たらない不確かな存在。それなのに僕とは違って確かに強大な存在感を誇り、善きにしろ悪しきにしろすべての人の心に居る。

魔法。王城の書庫にもいくつか魔術書なんかがあったけれど、試したところで何も起こらなかった。それどころか完璧な僕が読めば、矛盾点や不可能なところがボロボロと出てきて、実現できないことをたくさん綴った妄言の塊だってわかった。

だって、そうだろ？ 月食の夜に鳴く鶏一羽の首を刎^はねて、その血をたたえた桶に雌のヒキガエルを一匹放ち、産卵させた後で雄へビを入れて受精させた卵を、次の月食まで光を当てることなく暗闇の中で育て、月食の光に当て孵化させることで呪われた化け物、コカトリスを作り出すことができる、だなんて。

書物によっては雄鶏^{おんどり}の産んだ卵をヒキガエルに孵化させるだとか、記述がめっちゃくちゃ。

ばかっている。よく考えてみたらいいじゃないか。雄鶏が卵を産むだとか、その時点で幻の化け物だ。カエルとヘビの合いの子？ 両生類と爬虫類でまったくの別種じゃないか。しかも月食と月食の間隔が一体どれほどなのか理解していないことがばれた。それまでの間、血液のようにこんなにタンパク質を含んだ液体を防腐剤

も何も加えないまま放置して腐敗するなど言うことがおかしい。

仮に滅菌処理をした器を用意して、そこに鶏の血を入れるまでは良いとしても、ヒキガエルやヘビに一体どれほどの雑菌が付着しているか理解しているかい？ S P F（注…特定の病原菌を保有していない状態）やノトバイオート（注…保有している微生物のすべてが知られている状態）、なんていうレベルじゃない。無菌で飼育する施設を用意してすべてを慎重に行わなくては出来るわけが無い。

要するに、偽物なんだ。

だけど逆を返せば、それが実現できると言う時点で神の領域。人外の業。

魔法使いとは、そう言う存在なんだ。

魔法使いは、お父様の駒にない。一人悪魔がいるけれど、それはお父様の意思では動かない。僕の言葉にだって耳を貸さない。

僕がこの駒を手に入れられれば、僕の目的達成が現実味を増し一段と速まる。もしこの駒が僕の意のまま動かなかったとしても、僕が魔法を使うことが出来るようになれば……

お父様の時代は終わりだ。

ああ、なんて素敵なんだろう。あの赤色や金色でゴチャゴチャとうざったらしいけれど、それでもどこか荘厳で、自らの力を確信できるあの椅子に座ることが出来るなんて。

思い立ったが吉日とは言うけれど、魔法使いが住むと言われる森がどこで、どのあたりなのかの情報を集めることが先決だった。残念ながら僕は立場上王城を離れることができない。そして問者のす

べてはいまだお父様の管理の下にある。

この状況で信頼のできる者、しかも城外の者を使って魔法使いの情報を集めることがいかに手間と時間がかかるか、想像に難くなかった。すべては秘密裡に行わなくては、意味がない。

そして三年が経ったあの日、僕はとうとう魔法使いを探しに出た。魔法使いの住む森の近くの村で、珍しい花の栽培に成功したと言う報告があったんだ。その現場を実際に視察して、献上するに値する物かどうか判断するために大臣が派遣されることになった。

最大のチャンス到来！ 外交の仕方を見学したい、と言う僕の申し出は快く受け入れられた。

問題なく視察も終わって帰還する頃、僕は行動に出た。使節団を離れ、森の中に入っていったんだ。

だけど、大失敗だ。ただでさえ深い森の中で迷ってしまうなんて。

森に入って迷わず目的地に着いたり迷わず森から抜けたりする技能を持ってなかったんだ。三年の間に木こりや狩人のような森のスペシャリストに教えを請うべきだった。自然を甘く見過ぎていた。だけどそこは完璧な僕。この経験があるから今後は同じことの繰り返しなどしない。

でもあの時は肝が冷えた。正直超絶絶体絶命みたいな？

取り乱すようなことはしなかったけどさ。

何度も何度も同じ場所を回ってる感覚に陥る。ここから抜け出せないかもしれないという圧倒的な不安感。

ああ言う感覚、なんて言うんだろうね？

後の世では名称が付きそうだけど、今の時代じゃ無理だろうね。

僕以上の天才が僕と同じ状況になることなんてまずないだろうから。

森で迷ってしまうような経験不足の僕だったけれど、結局は神に愛されてる完璧王子だった。

ふと気がついた時には急にどちらに進めばいいのか判り始めた。それまではこっちか？ って疑問符付きの手探り状態だったのに、こっちだなんて確信しか沸かない。

やっぱり僕は特別だというしかないだろう？

召使いたちと合流したんだけどさ。あいつらの情けない面ったら無かったね。

ああ、王子！ 無事で良かった！

この森は深くて遭難者が多いと有名なのに！

もしも王子の身に万が一のことがあれば我々は！

大臣までもが揃いも揃って取り乱してた。

まったく、お前達の一番の心配事は派遣先で僕を失った無能さ加減をお父様に知られたりしないかどうか、だろう？

懸命に探した、と言うのも所詮は保身のためじゃないの？

こいつらの胸中はすっかり見透かされてるって気付いてるんだらうか。

……城内だったら一人だけだろう、僕の身を本気で案じてくれるのは。ウザいけど。

いや、まあそんなことはどうでもいいんだよ。

ここからが僕の語りたい所の本筋。現れたんだ、現れたんだよ！

魔法使いが僕のところに！

けどソレは、噂に聞いていたような男ではなくて、女の子だったんだ。

出会いは最悪。いや、それからのことを考えても最低だね。ただ、そいつは間違うことなく魔女だった。

第九話 「完璧、なんてありません」 (後書き)

原案…クロクロシロ様

第十話 「認める事も大切です」 (前書き)

第十話 原案…クロクロシロ様

第十話 「認める事も大切です」

恥ずかしながら天才の僕が、魔法使いに接触できるせっかくのチャンスを生かせなかった。もうそれだけでも忸怩たるもののなのに、その日は間違いなく人生の中で最悪。王宮お抱えの占い師に見てもらったらきつと今は僕の天中殺や大殺界なんじゃないだろうか。

それはいいんだけど、次の作戦を考えていた時、その子が現れた。「その子」というのが相応しい。女性っていうには幼すぎる印象だった。

おいおい衛兵さん。無能だ無能だとは前から思っていたけど、こんな小猫連れの子供の侵入者まで許しちゃうわけ？ まあいいや。ここは爽やかで人望も厚いすてきな王子様のまま、優雅にお相手いたしましょう。

……それがすべての過ちの始まりだなんて、その時は思いもしませんでした。

護身具の一切を持たず相手に歩み寄るなんて、これから先は絶対しない。僕も平和ボケしていたんだって思い知らされてしまった。だってまさか、初対面の女の子が出刃包丁片手に僕の前に現れるなんて、考えていた最悪のさらに斜め上。そして第一声が

「……王子様、私の家に来てください」

何の冗談だと。僕の目の前で繰り広げられるイリュージョン。さすがに天才の僕でもこの超展開にはついていけそうにない。戸惑っているとさらに一歩女の子が歩み寄ってきた。

痛っ

ニコニコ笑ってるけど包丁の切っ先、ちょっと刺さってない？
ねえ、どう見ても先っちょが僕の服に飲み込まれてるんだけど！
これはもうお願い、依頼じゃない！ 明らかに脅迫だ。一国の王子としてそんな要求、自分の命がかかっていたって従うもんかつ。そして次が僕の返答。

「よろこんで」

（あっさり従いやがった！）

（動揺しすぎて意に反したことを口走るなんて意外と凡夫なのね）
（まあまあ、それが人ってもんですよ。結局自己の保身を成立させなくてはこの先の夢の実現すらままならないのが現実ですから。“所詮”王子と言っても人の子ですよ）

ふっ 周りの愚図が何て言おうとかまいやしない。僕はこんな危険な状況にあっても決してチャンスを見落したりしない。ここが僕が非凡たるゆえなんだよ、まあ言ってもわかるわけないか。

従うしかないじゃないか！ だってあろうことか、猫が喋ったんだよ？

マジカルだよ！ 些細なことかもしれないけど、魔法を感じずにはいられないっ

しかもその猫、その女の子に『魔女なんだから魔法を使おうよ』って言ったじゃない？

もう確定だ。確実にこの子こそ僕が会おうと思っていた魔法使い！ 確定だ！ 凡人が魔法使いを探しに森に行っても、住まいも分からない、ルートもわからないでは遭難するのは確定。そう、シャパンを一気飲みしたら暖気（注：おぐび）が出るくらいに確定！

まさか向こうから来てくれるなんて！　こりゃ、ついていくしかないねって思った訳。

え？

猫が喋りだす前にもう魔女の要求に従ってないか、って？
気のせいじゃない？

だって僕は完璧だぜ？　そんな情けないことするわけがないっ

とにかくその子、出刃包丁突きつけて、恍惚としていた。僕の顔見てどう？　みたいな表情してるし。意味わかんないって。

それともあれか、魔法使うための何かの儀式？

あ、なるほど、そういう事かっ　トランス状態ってこの事か。いつの間にか黒豹が居るし！　魔法だ！　とうとう直に魔法を見ることが出来ました！

っーか、衛兵達の情けないこと情けないこと。たかが黒豹一匹にびびって僕を助け出せないなんて……

い、いや違うよ？

助けられちゃ僕の目的が達せられないから困る！　だからこれで良いんだけど！

部下の錬度の低さは上司として気になるじゃないか。

べべべべべ、べつに助けて欲しかった訳じゃないよ？

とまあ、こんな具合で拉致さ……　同行することになりました。念のため言っておくけど任意でだから！　でもトランス状態の魔女の持つ出刃包丁、ちよつとずつ刺さり方がえげつなくなってきたます。このままだとぶっすりと来る！　さすがにこれはまずい！　誰か魔女を正気に戻して！

そんな風にさりげなく困っていたところに途中で知り合いが駆け

つけてくれたんだ。

それがアルファーネ。僕を取り巻く愚図どもの中でも、少しだけマシな奴。

それにこれだよ、これ！ 女性っていうの！ 比較にあげられないけどやっぱりこの魔女はまだまだお子様だね！ だけど僕は正直コイツ苦手だ。たとえどんなに器量良くスタイル抜群で、何をさせても絵になる存在だとしても、No thank youだ。

僕の許嫁という立場になってるんだけど、はつきり言ってウザイ。べつたりくっ付きたがるし。

何よりも許せないのがさ、ぼくより強いんだ。

師範より強くなった僕が勝てない姫様？ 立つ瀬がないなんてものじゃない。ここはどこの女帝国家ですか？ いや、それも剣持った僕を一度の手合わせで百回くらい殺せるんじゃないかってくらいの豪傑。それも、素手でっ！

何その人類規格外。

外見美人の中身ゴリラ女！

とまあ、真に残念ながら(?)この雌ゴリラ、もといアルファーネ相手じゃあ黒豹君も敵じゃない。

熊とかドラゴンとか平気で殴り殺すしね。殴り殺していいドラゴンなんて居れば、の話だけれど。今じゃ数もとでも少なくなってるドラゴン自体が人間に歩み寄って共存の道を模索している最中。とても友好的なんだ。手を無闇に上げようものなら人からもドラゴンからも非難にあって社会的に殺されてしまう、危険な情勢にあるんだ。いや、この際どうでもいい。

魔法を学びたかったけれど、このままではDeath or Dieだ。出刃包丁からは何も学べないってことで、諦めますよ。

そう、今だからこそ、言えるよ！

君は素敵だ、僕は君となら結婚してもいいっ！
だーかーらー、助けてアルファーネ！

そう、彼女にケンカで勝てる相手なんて無い。

……そんな風に思っていた時期が僕にもありました。

だけど、僕の後ろで包丁を持っていたのは、魔法使いだったんです。

第十話 「認める事も大切です」 (後書き)

第十話 原案…クロクロシロ様

王子に一言。美人さんを無下にしてるんじゃないよ、ねえよ、若造がつ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4157t/>

ふりむいて、王子様！

2011年8月20日14時16分発行